

この本では女性たちが活躍する話を3つ、とりあげました。

第一話「黒雲に飛びのつて戦いにいった女の子」は、英雄オタスツウングルが敵に襲撃されて危機に陥っていることを夢で知った少女のお話です。こういった戦いの物語では、女性たちも空を飛び、剣をとつて戦います。このお話でも少女は戦いにおもむき、剣をふるつて敵を撃退しています。もちろん、少女は人間ですから、自分の力だけでそんなことができるわけではありません。雷の神（カムイ）が助けてくれます。夢で知らせ、黒雲に乗せ、戦場ではともに戦ってくれます。雷の神は、いわば少女を操つて、行いの正しいオタスツウングルを助けたのでした。こうして最後にはオタスツウングルと雷の神があらためて関係を結んで話が終わります。語り手本人の話によると、少女の正体は「オタスツウングルの

妹」で、オタスツの村から分家してきたとのこと。いわば分家の者が本家を救った、という展開なのです。少女が身につけている鎧兜がどのようなものは、よくわかりません。今回のイラストはサハリン島（樺太）で隣接していたニヴフ民族が使用していた鎧兜を参考にしました。

オタスツというのは物語によく登場する地名ですが、どこののか具体的にはよく分かりません。オタスツウングルというのは「オタスツの人」という意味で、オタスツ出身の英雄は物語の中でこう呼ばれます（本名は他にあるのですが、物語では語られません）。彼らが戦っている相手が何者なのかは語られていませんが、すぐれた英雄が他の人々に妬まれ、理由もないのに戦いをしかけられる、というのはアイヌのお話ではおなじみの展開です。

第二話「雷を打ち負かした女の子」は、雷神たちに強引に求婚され、天界に連れて行かれた少女が、家の守り神（蜂のカムイ）や理解ある神の助けで無事に家に帰るまでのお話です。第一話では人々の味方をした雷神ですが、このお話では自分勝手な兄弟として登場します。

この話のメッセージは明快です。どれだけ周囲の支援があっても、結局は自分の力で道を切り開くしかない。そしてまた逆に、自分の成功は自分一人のものだけでなく、周囲の支援があるからこそだ、ということ。靈魂となった少女が自分のぼろぼろの死体を見るなど、衝撃的な場面が続きますが、最後はハッピーエンドです。なお、人間の靈魂はその人の姿をしています。イラストではほんのり光に包まれる演出になっていますが、具体的にそう考えられているわけではありません。

このお話では雷神の一族は天候を司っているようです。「燃える太陽のばばさま」と「冷たい雲のじじさま」も天候を左右しているのでしょう。彼らが何者なのかはわかりません。雷神の一族であり、おそらく天候を司る神さまなのだと思いますが、はっきりしません。

彼ら雷神の一族は、身勝手な雷神兄弟の行いを止めな

かったために、酷い目にあいます。そして最後には人間たちから「神（カムイ）といえども決まりを破れば罰を受けることになりすよ」とお説教をされることになります。神も人間もお互いの「決まり」を守つて暮らしている、相手がそれを破ろうとしたときにはお互いに警告するべきだ、というアイヌの伝統的な考え方がよく表れた場面です。

このお話に限らず、雷神は蛇体をしているともいわれますが、蛇が蜂を苦手とする、というのは日本の昔話からの影響かもしれません。このお話には他にも「炎の馬」や「炎と氷の扇」など不思議なものが登場します。もともとは馬はあまり飼われていませんでしたし、扇も日本のものです。

第三話「草の小舟で流された女の子」は、虐待を受けて育った少女が自分を取り戻し、幸せになるというお話です。本当は幸せになるはずだった少女が、悪者の企みで不幸な境遇で暮らしているさま、神々や英雄の助力で幸せをつかむ過程が、ていねいに描かれます。

意地悪な育ての親（おば）は主人公の少女に満足に食

事も与えず、土間で育てます。それどころか、水汲みをさせるときも「きれいな水を汲むとしかり、汚い水を汲むとほめる」などして、わざと「だめな子」に育てようとしています。人間のすべてを奪っておいでから、最後には「草の小舟」に乗せて海に流し、殺してしまおうとするのです。でも「囲炉裏の下座のおばあさん」という神が少女を守ってくれます。食事を与えて飢えないようにし、少女が「だめな子」になるのも防ぎます。この神が少女の魂を眠らせ、「だめな子」に見せかけているだけで、少女の心の奥底には、りっぱな心、利発な精神が眠っているのです。そして神々の助力によって「草の小舟」も沈まずに、許婚の住むイヨチの村へ流れつき、お話が動きだします。

シヌタブカはオタスツと同じくお話によく出てくる地名ですが、現在ではどこかわかりません。イヨチは余市だとも考えられますが、どちらかというところでも「お話の中の地名」と考えた方がよいかもかもしれません。主人公を助けてくれる「囲炉裏の下座のおばあさん」は、いわゆる「火の神」とは別の神さまでありますが、おそらくよく似た部分があります。囲炉裏の中央にいると考え

出典 物語を語ってくれた人

この本にのっている物語はみな、アイヌのおばあさんたちが、語ったり、書きのこしてくれたものです。それを元に、あたらしく、わかりやすく書き直しました。次の本に、元のお話が、アイヌ語と日本語とで、のっています。

黒雲に飛びのって戦いにいった女の子

沢井トメノさん（一九〇六年～二〇〇六年）本別（北海道）

『昭和61年度アイヌ民俗文化財調査報告書（アイヌ民俗調査VI）』（北海道教育委員会、一九八七年）所収

切替英雄（採録・訳注）「カンナカムイがオタスツ人を救う話―いなずまを落としながら飛ぶ黒雲―」

より

雷を打ち負かした女の子

黒川キヨさん（一九〇〇年～一九八五年）平取（北海道）

木村キミさん（一九〇〇年～一九八七年）平取（北海道）

『アイヌの民話2』（アイヌ無形文化伝承保存会、一九八五年）所収 中川裕（採録・訳注）「雷神を負かした娘」「別伝『雷神を負かした娘』」より

草の小舟で流された女の子

金成マツさん（二八七五年～一九六一年）登別（北海道）

『平成19年度アイヌ民俗文化財調査報告書（ユーカーラシリーズ30）』（北海道教育委員会、二〇〇八年）所収 金成マツ（筆記）・蓮池悦子（訳注）『わたしのおばが草小舟にわたしを乗せて流す』より

られている「火の神」は女性と関係が深い神さまで。アイヌの伝統的な儀礼では女性は神々に直接祈ることができませんが、「火の神」には直接祈ることができます。「囲炉裏の下座のおばあさん」が助けてくれたことも、主人公が女性であることと関係があると思われる。なお、主人公が流される「草の小舟」は実際にはどんなものかわかりません。病気の神への供物を乗せて流す儀礼に用いる小さな模型のような小舟を、イラストの参考にしました。

このお話には、他にも「狼のなめし皮」でできた「襟や裾に模様入りの金属の板のついた小袖」が登場します。これは実物は残されておらず、どのようなものなのかわかりませんが、母から娘に伝えられるものなのでしょう。

いずれのお話も、アイヌ民族の女性が語り、あるいは書き残した女性の物語です。少し長いものもありますが、長い年の面白さがあります。若い方や女性に限らず、多くの方に読んでいただければ幸いです。

（文・丹菊逸治）

公益財団法人アイヌ文化振興・研究推進機構

アイヌ民話撰集企画編集委員会 企画委員

丹菊逸治 (委員長、北海道大学アイヌ・先住民研究センター准教授)

高橋靖以 (委員、北海道大学アイヌ・先住民研究センター研究員)

関根健司 (委員、平取町二風谷アイヌ文化博物館学芸員補)

押野朱美 (委員、一般財団法人アイヌ民族博物館伝承課学芸員)

阿部かおり (委員、北海道立図書館利用サービス部資料課主任)

イソイタク3

アイヌの昔話 雷を打ち負かした女の子

発行日 平成28(2016)年3月16日

企画・監修 アイヌ民話撰集企画編集委員会

語り 沢井トメノ・黒川キヨ・木村キミ・金成マツ

文・編集 寮美千子

絵 鈴木隆一

装丁 松永洋介

発行 公益財団法人 アイヌ文化振興・研究推進機構

〒060-0001 札幌市中央区北1条西7丁目プレスト1・7

TEL 011-271-4171 FAX 011-271-4181

URL <http://www.frpac.or.jp/> E-mail ainu@frpac.or.jp

印刷 株式会社 北海道機関紙印刷所